

---

# **最強の俺と最弱の少女が魔法学園で同居生活（仮）**

落果聖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最強の俺と最弱の少女が魔法学園で同居生活（仮）

### 【NZコード】

N8195Z

### 【作者名】

落果聖

### 【あらすじ】

二人がかりで一つの魔法を唱える現代。

炎を使う魔法使いの名家の生まれである火野昇は、天才魔法使いであるが炎の魔法を一切使うことが出来なかった。

そんな昇は自らの野望を叶えるために魔法高校に入学した。魔法高校では一人一組で魔法を学ぶのが基本であり、一緒に学ぶ相手の実力が学校生活を大きく左右してしまった。しかし残念な事に昇のパートナーは炎の魔法しか使えない補欠合格のド素人である倉守美海になってしまった。

そんな二人が一つ屋根の下に暮らし、助け合いながら自らの望みを叶えるために戦う現代学園ファンタジー  
ダブルヒロイン、チート主人公になる予定ではあるけど予定は予定で未定だつたりします。タイトル変更さらにタイトル募集中（前に着けてたタイトルは純粋な炎のアンサンブル）

## プロローグ

魔法高校、正式名称は魔法特区大学附属高校には毎年三万人近くが入学する。

なぜそんなにも入学希望者がいるのかと言えば、この場所では地位も名誉も金も望むのならば全てを手に入れることが出来るからだ。二十歳未満で所得が一億円を超えていることも珍しくないし、卒業後政治家として活動している人もいる。

そこまでいかなくとも、魔法高校と大学併せて七年間を過ごしほどほどの成績で卒業できたのならば、一流企業へ簡単に就職することも出来る。

これが学校の光の部分。

光がある場所には必ず闇ができる。

魔法高校が発表しているデータでは毎年数千名にも及ぶ死傷者が出ている。名目上は事故として処理されているが、実際は魔法使い同士の決闘によって死んだり怪我をした数だ。

魔法使い同士の決闘では、ミンチになつた肉片が残つていればマシな方で、死体そのものが消失していることも珍しくない。

対照的に過失致死罪での逮捕者はほとんど居ない。これは魔法高校が事実上殺人を容認しているからだ。

だからといって魔法高校が生徒の死を望んでいるわけでは無い。魔法高校では入学希望者に対して事前にこれらの事をきちんと説明している。

それでもなお、若者達はそれぞれの野望を、希望を抱いてこの学校に入学していく。

一瞬の静寂の後拍手が湧き上がった。最低の気分だ。

まず闘技場を始業式に使うって言う発想が最悪だ。毎年この闘技場だけで死人が100人は出てるぜ？ そんな場所で祝いの門出がなんて語るのは馬鹿らしい。

そんな物よりも俺が欲しいのは歓声だ。煮えたぎる興奮が頂点に達した時に心の奥底から湧き上がってくるような奴。それこそが勝者に対する報酬と言う物であるべきだろ？ まあ、新入生代表の挨拶であることを考えれば入試一位で突破した者への報酬と考えられるけど、大半の人間にとつては常識だからやつてるだけにすぎない。

挨拶を終えて壇上から降りる頃には闘技場内に広がるのが拍手から話し声に変わっていた。一人二人ならいざ知らず、この騒音に参加しているのは会場内にいる新入生約30000人で、自分の声を相手に伝える為にさらにわめき散らすものだから收拾がつきそうもない。

つむさいつて思うけど、だからといって騒いでしまう気持ちも解る。これからこの学園入学式における最大のイベントが待っているのだから。

席に戻ると俺の相棒である氷河樹里<sup>ひょうがじゅり</sup>が隣の席で待っていた。

氷河樹里とは五歳の時から和声魔法<sup>ハーモニー</sup>を一緒に使う相手である和音<sup>コード</sup>として付き合ってきた。おかげで異性としての認識は全くなかった。

「ノボルかっこよかつた。」

樹里は俺にそう語りかけながら手のひらサイズの袋を俺に手渡した。この袋がイベントの主役だ。

「何言つてんだよ。俺は何時だつてカッコいい」

「たまには褒めてあげようかと思つて言つたらこれだもん。可愛く

ないな

へえ～樹里はそんな事を言つのか？

ならば意趣返し。

「…………樹里の髪の毛綺麗だよな  
意趣返しではあるけれど、心にもない台詞かと言ふばそりでもない。

「髪は乙女の命だから綺麗にして当然だもん」

樹里はそっぽを向いてしまう。

髪は乙女の命と口癖のように言つだけあって、樹里の髪の毛はかなり綺麗だ。胸元まで真っ直ぐ伸びた髪で、風にいつも弄ばれている。色は銀とも青ともつかない色で、光の反射で幾重もの姿を見せる。

もつとも、髪色と言ひ點について言えば、氷河の一族はみんな同じような髪色だ。魔力が関係してゐるらしいけど、詳しくは知らない。さすが魔法使いの名家と言いたい所だけど、他の名家にそんな特色は存在せず、たまに全然違う髪色の子供が生まれたりするぐらいだ。少なくとも火野昇ひののぼる、つまり俺は黒髪だし、火野の一族もほとんどが黒髪だ。

俺は樹里の顔を手でもつて自分の方へ向けた。

樹里の顔は紅く染まっている。

そして何より、そんな顔を見せたくないのか必死になつて反対へ向こうとするから可愛い顔が台無しだった。つぶれて変顔である。さてこの顔は一体どこまで変顔になれるのだろう？ と俺が趣面を大幅に間違えようとした時に闘技場からざわめきが消えた。

壇上には樹里の叔父である氷河氷柱ひょうごうひづるが立っていた。

前に何度か会つたことがあるけれど、あまり相手にしたい相手では無い。快樂主義者を自称して、その場その場の刹那的な生き方をしている。そんなわけで俺も樹里も何度も迷惑を被つた事がある。「君たちの学年を担当する氷河氷柱です。まあボクの事なんてどうせイヤでも覚えるので、さっそく本題。

さきほど君たちに配られた袋には指輪、鍵、寮の住所と部屋番号が書かれた紙の三つが入っているはずだ。……もしも無かつたら後で職員棟に来なさい。

それでだ。指輪を取り出して中指に付けて貰いたい。

この学校で初めて魔法を学ぶ物も少数いるので説明しておくと、この指輪は結合指輪(リンクリング)と呼ばれる物で、二つ一組の指輪だ。この指輪を使い一人一組で使う魔法、和声魔法(ハーモニー)が君たちの学ぶ魔法だ。

なぜ一つ一組なのに君たちの手元に一つしか無いのかと言えば、もう一つは君たちがこの学校で和声魔法を使う時のもう一人の相手(コード)である和音の手に渡つていいからだ。和音の相手に不安があるかも知れないが、入試の時に相性も調べてあるので、魔法が使えないなんてことはまず無いので安心して欲しい。

この指輪は魔法を使うだけでなく、もう片方の指輪をはめている人物と通話することが出来る。それで通話して友情を深めて貰いたい。

相手の声は頭の中で響く、自分の声を伝えたいときは口で喋るのではなくて、強く思えば伝わる。逆に言えば言いたくなくても伝わってしまうこともあるので、慣れない内は気をつけよう。以上。これをもって入学式は閉会。」

そう言うと氷柱は逃げるよに壇上から降りた。

俺の時と違う変わらない拍手が舞つた後についにみんなのお楽しみタイムである和音発表の瞬間だ。

和音は席替え、いや、クラス替えなんかよりもよほど重要だ。和声魔法を一緒に使う相手をえることはほとんど無い。相性によっては全然使えない可能性もあるし、同じ相手としている方が魔法の扱いが容易になるからだ。

逆に言つてしまえば、そう言つ相手がすでにいると、まず相手が変わることない。長期間同一の和音だと、お互いの魔力の波長が似通つてくるのだ。

つまりだ。十一年間も和音である樹里を超えるような相手なんて

まず表れる訳が無い。見知った顔に安堵する」とはあつても驚きやとまどい興奮なんて物とは無縁だ。

「そう言つわけで、俺にとつてはこのイベント、特に楽しいところが無かつた。通話の必要性が全く無い距離だぜ？」友情を深める必要なんて今さら無い。

俺は袋から指輪を取り出すと、早速指に付けた。と思つたら樹里に止められた。

「もう一人で付けないでよ。こいつのへつせ、一緒に指輪をつけようよ」

「はいはい」

まあ樹里が相手なら特に問題も無い。人見知りと言つわけでも無いが、これから寮生活が始まる時に友人が居ると言つのは非常にありがたいものだ。

「こいつのへつせ！」

樹里のかけ声と共に俺と樹里は指輪をはめた。と言つか何でお前は左手薬指にはめる？どの指でも、と言つつか足の指でも問題は無いけど、そこは別の意味で問題があるだろ？

指輪をつけて十秒もしたけれど、頭の中で特に言葉が響く様子は無かつた。樹里が目を細めてにらみつけてくる。メガネでも忘れてきたようにしか見えない。

「ノボルなんか反応してよ」

「お前こそ何か言えよ」

「わたし言つてるよ！」

「俺も言つてるぜ」

てすとてすとてすと。と面白との欠片も無いつまりない文章をね。

「故障？ 叩けば治る？」

「電化製品は叩いたつて直らないし、クソガキだつて叩いて直る事の方が多い。ましてや纖細な魔法道具である結合指輪が直るわけ

俺が言葉を続けようとしているとき、樹里の顔色が変わった。おぞましい何かを見たような顔で、樹里が迷子になつた時同じような顔をしていたのを思い出させた。

「ねえ……ちょっと言いにくい事いいかな？」

「じゃあ結合指輪コンクーリングを使って話してくれ。それなら聞かれない」

「もうー！ そうじゃないの！ あのね。どうやら別の人コードが和音みたいなの」

俺の頭は理解を拒絶した。

「俺よりも相性が良いと言つことはかなり強いって事もあるし、むしろ良い事コードだろ？」

一般的に和音は自分と同じ程度の実力であることが望ましいとされる。和音を決めるのに使われるワーグナー方式の判別法では実力の部分も加味されている。つまり、樹里の和音は俺ともほぼ同等の実力を持ちつつもさらに俺よりも樹里との相性が良い相手であると言つことだ。

「でも、わたし、ノボルが良かつた」

樹里は本気でへこんでいた。

「俺も樹里相手が良かつたが、決まった以上しようがない。」

俺は樹里の頭を撫でる。何時撫コードでても撫で心地は満点だ。

「こんなところでへこんでると和音に失礼だ。いつもの笑顔に戻つて出迎えてやれよ」

「う、うん。じゃあ向こうから場所の指定されたから行つてくるね。また後で、連絡してね、絶対だよ。そしたらお互いに和音を紹介しようね」

樹里は俺に向かつて手を振りながら人混みに紛れていく。名残惜しそうにこっちを見続けるものだから樹里は他の人に当たつてしまつた。

俺が見て無くとも大丈夫なのか少々不安だが、俺が付き添つ訳にもいかないしな。俺にも和音<sup>ヒーナ</sup>が待つてることだらうじ。向こうが連絡してくるまで待つしか無い。

俺は携帯ゲーム機を取り出して、時間を潰すことにした。

遅い。あんまりにも遅い。カツラーメンなら三つ出来るぜ？ 一分で食べる俺なら五個は食べ始めるぜ？ 本当に故障か？

(ごめん待つた？ あんた名前は？)

妙に癖のある女の声だ。

(何で遅れたんだよ？)

(そこつて普通ボクも今指輪はめた所なんだよって返す場所じゃないの？)

(俺は女に特別優しい訳じゃない。それに待ち合わせじゃないくて、指輪をはめるだけなのに遅れる訳ないだろ普通)

(せっかく花もたせてあげよってのに、つまんない奴)

そんなくだらない花なんかいるかよ。

(んで、何で遅れたんだよ)

(……キンチョーしてた)

響く声に照れくささが見え隠れしていた。まあこれから和音<sup>ヒーナ</sup>としでやつしていく相手だ。お説教もこれぐらいにしておくべきだらう。

(どんな人かなつて思つてたけど、キンチョーして損した) もつと色々言つておるべきだったと後悔した

(俺は火野昇、君は？)

(倉守美海)

(よろしくな倉守)

ぐだぐだと指輪越しで会話するのもあれなので、俺たちは場所を指定して落ち合うことになった。

他の生徒達もまあ似たような物で、あえて分類したとしても、学生寮の方まで行くか（基本的に和音の部屋は隣になっている。）か、そこら辺のファーストフード、ファミレスにでも入るかの一択だ。俺は人混みが嫌いだし倉守も人混みが大嫌いだったので、闘技場から一駅離れた大学研究棟駅のホームになつた。

学園の敷地内には電車が走つてゐる。学園の敷地を縦に一本横に一本周りをぐるりと囲むように一本存在してゐる。

学校」ときに何で鉄道までしかれてゐるのかと言えば、正確に言うとこの学校は学校ではなくて魔法特区に指定された特別な場所だからだ。その魔法特区の中に教育施設が分散して配置されていいると言つた方がより正しいが、世間一般では魔法大学と一纏めにされている。

この学校が殺人を実質容認しているのもこの魔法特区制度が主な原因だ。

日本が魔法産業を主軸にする国家戦略を打ち出して三十年。その甲斐あってか現在の日本は魔法技術に関して他の先進国よりも十年ほど先と言われている。

そう言つわけで、この学園の敷地というか、魔法特区には様々な企業があり、様々な魔法の実験が行われ、富、名譽、地位を求める人が集まり、命がゲーム感覚で消えている。

電車に数分ほど揺られてると大学研究棟駅についた。

学生寮がある方面とは反対側にあるので、先ほどの人混みは夢か幻かと聞きたくなるほど人が全然居なかつた。

駅にいるのはスーツを着たおじさんとか、白衣のままスーパーの

袋をぶらさげている姉さんとかで、少なくとも俺の和音と言えるような人じゃない。

俺はちよりちよりと辺りを見回すけれど、やはりそれらしい人はいないし、指輪で話しかけても反応が無かつた。大半の人間にとつて指輪による通話は思考が漏れ出ているのとほとんど一緒なので、用が無ければまずしない。

つまり、また待つか……これなら携帯電話の番号ぐらい聞いておけば良かった。魔法特区内なら電車内での通話も合法だしね。

ベンチに座り十分ほど待っているとようやく次の電車が来た。扉の開く音と共に俺はその中に少女がいるかどうか探すためにきょろりと見回す。

はずだったのだが、そんな必要もなく、田の前にああ絶対こいつだ。と確信させる少女が目の前に立っていた。

初めて見たときの感想を言わせて貰うのならば、最悪だった。まず身長が低くて、手足が細い。これが女の好みについての感想だったならば、まあ悪くない。と軽く返せたかも知れなけれど、魔法使いとしては致命的だ。

魔法使いは肉弾戦もこなすので、出来れば高身長の方が良い。真っ赤な髪をツインテールにしており、つり目で真っ赤なアンダーフレームの眼鏡をかけており俺のことをまっすぐ見据えている。唇は上に曲がり、さてこれからどんな悪戯をしようか悩んでいるようにも見えた。

眼鏡をかけているのも魔法使いとしてはマイナス要素だ。コンタクトレンズに後で強制的に変えさせよう。

俺が値踏みをしているように倉守も値踏みをしているのだ。電車がホームから立ち去ると美海は口を開いた。

「ごめん待った？」

何、ふざけた事をいっているんだ？ 大体同じような時刻に闘技場から出て、同じ駅で電車に乗ったはずなのに何故遅れる。

文句の一つでもぶちまけてやろうかと思ったが、俺は別の台詞にした。

「いや今来た所だ」

今後の事を考えれば対立する意味なんて無い。そう言つわけで俺は美海の言つところの花を持たせて貰うこととした。

「どう考へても一本先のに乗つてきてる」

どうやら美海は花より団子らしい。

「さっきお前が今来たところって言つシシチュエーションって言つたからわざわざ言つたのにこれかよ

「あんなあたしが適当に言つた言い訳信じたの？」

「次から絶対に信じない事に決めた！」

魔法の相性とかどうでも良いから樹里と組ませて欲しいと心の底から願い始めた。

「んで、倉守は何の属性が使えるんだ？ あとどれぐらいの腕前なんだ？ 知らなくて悪いと思うが倉守ってどんな家なんだ？」

「いつぺんに言つな！ ええと、試験の時に調べたのだと炎だけだった。魔法はこの学校に入つて初めて学ぶ。最後の質問は意味がわからんない」「

俺はその答えが訳解らん。

まず人間は体内に属性比率と言う物がある。例えば樹里ならば水が四割風が三割で他の三割が他の基本属性全てで構成されている。この属性比率が使える魔法の優無や得意不得意を左右する先天的な要素となる。この属性比率内に存在しない属性はどうやっても唱えることが出来ない。ワーグナー方式では10%を切つてしまふ属性を正確に判断することは出来ないので、美海の具体的な属性比率は解らないけれど、炎が八割で他の一・二・三属性で一割と言つのが妥当な所だろう。

魔法の基本属性は九種類とされており、一般的な人間で約五種類

使って。名家の出身だと全て使えることが多い。

「ワーグナー方式だとこの使える属性の数も考慮に入るはずなのだ  
が……

「どうした？ あたしの美貌に惚れたか？」

「まな板を通り越して洗濯板のお前が何を言つてる？」「

「何を！？」

あ、でもよく見たらふくらんでこむよつにも

服の皺だった。

「それより少し用事を思い出した」

倉守はざきやーぎやーと何か叫んでいたけど俺は無視して職員棟に向かった。名家の中でも五本の指に入る火野の出身で、基本属性を八種類使え、さらに禁忌属性である時の属性まで使え、五歳の頃から英才教育されてきた俺が、ド素人と組むなんてあり得るはずがない。

リンクリンク

結合指輪に故障が無いとするなら、学校の方に問題があつたに違いない。そう思つて俺は直訴しに来たのだ。

「俺は倉守を置いて職員棟に入ると、俺は知つてゐる顔を見つけた。  
「おじさんちよつと話があるけどいいか？」

「ここでは樹里のおじさんじゃなくて、氷柱先生と呼んで欲しいな」「わかつたよおじさん。それで、俺の和音ハーモニーが間違つてるけどどういう事だ？」おじさんは突然笑い始めた。あまり品の無い笑い方だけど、誰もおじさんの方を見ようとはしない。たぶん聞き飽きてるんだろう。

「ああ。そういうやうだつたな。すっかり忘れていたよ。

確かに昇が間違つたと思つたのも解るよ。確かにボクも昇と倉守さんの判定結果には驚いたし、間違つたと思つて再検査もした。しかし間違つたはなかった。一年生の中で君と一番相性がいいのは倉守美海だ。

この結果は職員達の合間でも話題になつたよ。

火野の中でも歴代最強クラスの素質を持つ入試一位の魔法使いと、どこの馬の骨かも解らない補欠入学で入ってきた一般人がタッグを組む。

学園始まつて以来の最強と最弱のコンビ。

こんな面白いことはボクでなくて面白がるだらうね

「もう一度再検査をしてください！」

「一度どころか三回ほどしたよ。倉守さんの詳細なデータは無かつたけれど、君の正確な判別データを火野に提出させた。その結果解つたことと言えば、他の組み合わせに間違いを見つけたぐらいだ。これ以上の検査はしないし、組み合わせの変更も無い」

頭が真っ白になった。

「ボクとしてはだね。最強と最弱のコンビと言つよりは火野であるのに、火が使えない少年と、火しか使えない少女のコンビであると言つ方が面白いと思うがね。

二人でゝゝ地獄の業火ゝゝと名乗るのがベストと思うが、どうかねゝゝ地獄の業ゝゝ君？」

ゝゝ地獄の業ゝゝつて一言で俺は思考を取り戻した。

俺を蔑むための二つ名。

火野の中でも歴代最強の炎使いと称された俺の父である火野彰はゝゝ地獄の業火ゝゝと二つ名で呼ばれていた。

そんな父を持つにもかかわらず俺は火が一切使えない。だから地獄の業火から火をとつて地獄の業。

お前の業は火が使えないことだとでも言つよくな。そんな二つ名。まだからといってこの快樂主義のおじさんが、わざわざ俺を蔑む理由も無いだろう。

条件反射で俺が反応してしまつただけで、おじさんとしてはただ単に言葉遊びとして楽しいから使つたぐらいだ。

何度も快樂に付き合わされた身としてはこれぐらいで怒る気にはなれない。

「わかりました。ありがとうございます」

「倉守さんの今後の成長に期待しなさい」

俺を超えてしまうような爆発的な成長をされたらされただで、俺の今まででは何だったのかと疑いたくなるので遠慮して貰いたい。

「そうだそうだ。昇君。後で君はボクに連絡してくるだろ？　だから携帯の番号を教えておこう」

じつやつて能弁に語るとき、それは不幸の予兆だと今までの人生経験で理解していた。

時間にして五分も経っていないのだが、倉守はご機嫌斜めになっていた。

いきなり連れてかれたと思つたら逆に放置だ。

俺でも怒る。

と言ふか俺はさつき似たような状況に合わされて怒つてた。

俺は謝罪の言葉を述べると、倉守は一応満足そうな顔をしていた。ハツキリ言つて下手に出るのは好きじゃない。

でも、こういう関係にしておくしかない。

俺にはこの学園で絶対に取り戻さなければならない物がある。

その為には優秀な和音<sup>コード</sup>が必要だ。しかしそれが手に入らない以上実力の低さを相性の良さでカバーするしか、俺には打開策が見つからない。

会話はぶつりぶつりと定期的にとぎれてしまう。しょうがないので、俺はその場で見つけた物とかを話題に出してはみるけれど、美海は意図的に会話を止めようとする。

そんな会話とは言えない会話をしながら、俺たちは学生寮にまで

来ていた。

学生寮は基本的に全て構造が一緒だ。なので極端な当たり外れと言つ物は存在しない。あえて言つなら駅が近いとか、隣人がとてもいい人だったとか、隣人は音量全開でデスマタルを聞いていてうざいとか。当たり外れなんてこれぐらいだ。

「倉守、お前何号室だ？」

「203号室」

「今、203号室つて言つたか？」

「言つた」

「俺も203号室だ」

お互に何とも言えない空白が出来た。さつきの会話の比じやない。今すぐここから逃げたい。できれば昨日ぐらいた。

俺は携帯電話を取り出すと、氷河氷柱（おじさんではなくて先生）と血口主張の激しいアドレスに電話をかけた。

「やあボクの予言は良く当たるねえ。教師を辞めて占い師にでもなりたいぐらいだ」

「ほんと教師やめてくれよ」

「やれやれ、女の子と同居するのがそんなに嫌なのかい？ ボクが同じ年齢の頃なら、大喜びしているぐらいだよ。当時のボクは女の子と一つ屋根の下で暮らして朝起こそれたいと常々思つていたからね」

「てめえの妄想なんて聞きたくねえ！ 何でそんな無茶苦茶な話が通るんだよー？ 何か間違いがあつたら大変だろー？ 倫理的におかしいだろー？」

「ほう。樹里と一緒に生活していた君が言つのかい？」  
片腹痛い。

「俺以外の生徒達の話だ」

樹里に関して言えば、異性と認識するのが難しい。

簡単に説明すると、<sup>コア</sup>和音同士で衣食住を共にした方が、相性が良くなるのは君は身をもって知つてるはずだ。それを全生徒にもして

貰おうと言つだけだよ

「倫理的にはありえない！」

「君は楽しいことを言つね。」の学校に入るときに人を殺すかも知れない。殺されるかも知れない。そのような決意を胸に抱いて来るし、実際に書類にサインまでしているのに、今さら男女の同居ぐらいで文句を付けるようなのは、この学園ではやつてはいけないね。個室が欲しいと言つたら学園ランディングの上位に入れれば特典で貰える。君の実力なら十二分に可能だろ？」

俺は人を殺す覚悟をしてきた。きっと倉守も樹里も同じように決意して来たはずだ。

「おじさん俺が悪かつた。『めん』

「君が謝ることは無いよ。同居の話を学校に持ちかけたはボクだしね」

「お前が原因かよ！… どうしこんな無茶が通るんだ！」

「ボクは魔法使いとしては三流だけど、人心掌握は一流なんだよ。折角だから説明すると、同居で開いた学生寮を他に貸し出す為だよ。他にも色々諸事情があるけど一番の理由はこれだ」

「本音は」

「面白そうだったから」

「死ね！」

「君はそりやつて怒つているけど、男同士でむき落しく同居する人々に土下座しなくちゃいけないと思わないのかい？」

「全く」

俺としてはそっちの方がまだマシなんだよー。

「そうか。とにかく同居するのも変更は無い。ボクも忙しい身だから失礼させてもらつよ」

俺が文句を言う前に携帯は切れてしまった。

「……クソ野郎…………」

一人暮らしになるからアニメグッズに囲まれて暮らせると思つたのに！

今まで頑張つて樹里にもばれずにオタクやってきて、高校に行けば一人暮らしになるから、好きなだけ困まれて暮らせると思ってのに！

あのジジイ！

魔法少女かなめマギカのトモエさんのフィギュアとか、トモエさんのおっぱいマウスピードとか、トモエさんの抱き枕とか全部買えないだろ！！

「ちょっと」

「ああ！？」

「「めん…なさい…」」

悪いのは倉守じゃなくておじさんだ。それなのに倉守に怒りをぶつけたってしようがない。

「ああごめん。同居で間違い無いって

「そんなのつてありなの！？」

「君たちは人を殺すかも知れない覚悟、人に殺されるかも知れない覚悟をしてきたのに同居ごときグダグダ言うなってさ」

犯されるかもしれないと言う危険性は、殺すかも知ないと言う覚悟の中に内包されている。らしい。

ところで、一人暮らしだからアニメグッズを収集しようとしていた俺の願望は？

「倉守つてアニメ見る？」

「見ないけど、何で？」

俺の希望は途絶えた。

女の子と同居したらキャッキャウフフの桃色ワールドが始まると思つてゐるのならば、まずその桃色な脳味噌をビリビリかじる。現実そんな甘くない。

部屋の右半分を倉守の陣地になり、左半分を俺の陣地になつた。一步踏み込む毎に、百円の休戦協定条約だ。

脱衣所でバツタリとかそんなイベントが起きるわけもなく、手作りの料理が出てくるわけでもない（朝食と夕食の準備は俺の役割だ。昼食はお互い別々）

現実は全く逆だ。

「何でお前があたしより先に風呂はいつてんのよー。」

と俺は生まれたままの姿を見られたり（しかも怒られた）

「朝食はトーストか田玉焼きじゃないのー!?」

と俺の朝食までトーストと田玉焼きにされた。（俺は納豆が食べたい）

学校始まつてから最初の日曜日、俺は樹里を呼び出して昼食を取つていた。

「だいたい俺より早く起きてるなら、自分で作れよー。五時起きの俺より先に起きてるなら役割交換したつて良いだろ？ 風呂掃除とかさ」

俺はファーストフード店の中で頭を抱える。文句は山のようにあるし、山のように言つたけれど、改善される見込みは無い。「ノボル静かにしないと」

口に手を当てて左から右へお口にチャックの動作もセットで樹里は言つた。

ちりりと俺たちのことを見る人間が確かにいた。

「ああごめん。こしても樹里は良いよな

樹里の同居相手は名家の一つに数えられる風間のお嬢さんで、かなりハイテンションで楽しい子だった。

「一緒にいて楽しいけど、やっぱり生活はみんな違うからいきなり同居生活になつてすりあわせるのは大変だよ。風間ちゃん。お片付け出来ない子だし、無許可で私の簾に乗っちゃうし」

簾は空を飛ぶ魔法道具全般の事だ。大体の簾はバイクとしても使えるし樹里が持つてゐるのもそのタイプだ。ついでに魔法特区内で簾として乗る分には免許不要。

「お互に苦労してゐるつて事か」

「でも。慣れるよ」

だといいけどなあ。口には出せなかつた。

「あ、みみちゃんだ」

俺は周りを見渡した。倉守がトレイを持つて右往左往していた。

「みみちゃんこつちこつちー！」

その呼びかけで倉守もひき拉アキラ氣づいて來た。嫌な奴にあつちまつたつて田は見なかつたことにしてやるよ。

樹里は席を詰めると、おいでおいでと倉守を手招きする。「あんたと会いたくないから外食にしたのに…」

「もう、そんなこと言わないの」

文句を言いつつも倉守は樹里の隣に座つた。

「一人とも何してんの？」

「みりや解るだろ昼食だよ」

お前の愚痴をしてました何て口が裂けても言えない。

「ふーん。そう言えばさ前に聞きそびれてたけどあんたらの関係つて何なの、彼女？」

樹里は飲んでたコーラを吹いた。

「違うよおただの幼なじみだよ」

少し頬を染めて首をぶんぶんと横に振つていた。犬みたいだ。

「ああ彼女じゃなくて、許嫁だもんな」

今度は樹里と倉守が同時に吹いた。

「マジ?」

「マジ!」

俺は目線で樹里を見るつむいていた。

「マジだ…今時本当にそんなのあんのかよ」

魔法使いの家だと今でも極々普通の風習だつたりする。

「なんでノボルは言つたの?恥ずかしくないの?」

少し涙を流しながら樹里は俺のことをぽかぽかと叩く。力が入つていないので全然痛くない。

「お前のそういう反応が可愛くてつい言つたくなる」

「ひどいよお……」

許嫁つて言つても諸事情で有名無実かしてゐる事を樹里が倉守に説明すれば、俺も本当の所を話しても良いのだけれど、樹里はそう言つことを一切言わないので俺も言わない。

「熱いわね」

「それに」

樹里は自分の食べかけのハンバーガーを俺の口の中についついんでまで、俺の次の台詞を止めた。

「みみちゃんつてどんな趣味なの?」

「どくしょ……お前今ぜつて一わらつただろ」

口の周りがケチャップだらけの状態でそれどころじゃない。俺はハンバーガーを樹里に返し、口の周りを紙で拭いた。

「他人の趣味で笑わねえよ」

そんな事を言い出したら俺の趣味が一番最初に笑われるだろ?それに熱心な奴バカにするのは父が……俺が許さない。

「勘違いして悪かったよ」

「ねえみみちゃんの読む本つてどんな本なの? ミステリー?」

「笑うなよ。ぜつて一笑うなよー それにあたしはお前じやなくて、氷河に向かつて言つんだからな」

世間一般でそれは笑つて欲しいときの前振りであるのだけれど、

立ち上がって身を乗り出してきてるのだから、お約束ではなくて、本当に笑われたく無いらしい。

「じゃあ樹里に向かって言えよ」

「……れんあいしようせつ。ほら、どうせあたしみたいな暴力系女子にはあわねーとか思つたでしょ！」

キャラと合わないのを気にしていたのか。

「キャラに似合つてないって話なら樹里も全然似合つてないぞ。こいつの趣味籌だし」

その次の趣味がゲームで好きなゲームがマリオカートと言つのが、俺をとても不安にさせるけどな。

「風と一緒になる感覚つて気持ちいいよ。良かつたらみみちゃんのオススメの小説教えて欲しいな」

会話自体は三十分もたつてなかつたと思う。

しかし今まで俺が倉守に抱いていた取つつきにくさは大分軽減されたように思える。やはり女の子の話し相手は女の子つて事なんだろうか？

「きつとみみちゃんは無理してるんだよ。環境になれたらきっと良い子になるよ」

倉守が用事があると言つて立ち去つたあと、樹里は笑顔で言つた。「じゃあ樹里はどうして倉守が無理してるんだと思つ？」

「それは、私にもちよつと」

まあ、それは本人から聞くしか無いだろ？

「この一件で関係が劇的に改善されると言うのならば、その一次元に浸食されすぎた脳味噌をどうにかするべきだろ？」

あれは、俺と仲良くしてたんじゃなくて、樹里と仲良くしてただけだし。

むしろ、状況としては悪化していると言つて良かった。

魔法高校での受業の大半は魔法実技、工学魔法、魔法理論の三つで構成されている。

さらに一年から、アーティファクト魔法道具、戦闘魔法、工学魔法、純粹魔法、のコース別選択が待つている。

一般的な魔法を教える学校では実技魔法は行われずに、戦闘魔法を除いた三つからの選択になつてゐる。理由は簡単で魔法使い同士の戦闘は危ないからだ。

そのため日本で学校と言う形で戦闘魔法を学びたいのなら魔法特区に来るしかない。おかげで魔法実技の受業になると、普段は炭酸の抜けたコーラみたいな不良生徒達でも、シャキッと背筋だけは伸ばすはずなのだが、

倉守美海は見事に爆睡していた。

と言つて何でこいつ寝てるの？　お前いつも十時ぐらいには寝てるよな？　用事が無いときは外ほつきあるいは、帰ってきたと思ったら飯風呂寝るのくたびれサラリーマンみたいな生活してやがるのに。

同じ釜の飯を食つを実践しようと思つた結果。冷えたご飯を一人で食べることも珍しくないんだぞ？

一人一組で学ぶ魔法高校では、成績もある程度一人一組で決められる。席もお互い隣同士で配置されるので、起こすのは必然的に俺の役割になつてしまつ。

そろそろ倉守が先生に指されるタイミングだったので、俺はほっぺを押した。押した。さらに押した、九十度のひねりも加えてみた。

だが、残念ながらこの死体、ただの屍のようだ。

しそうがないゆするか、と思ったときにはすでに当てられていた。さらにタイミングが悪いことに当てられたタイミングでは寝ぼけながらも立ち上がってしまった。

「倉守、遅延魔法について答えろ」

壯年の教師はすでにため息をついていた。

「……チエンマ法?」

「よだれたてるぞ」

それでようやく倉守は現実に戻ってきて、ハンカチを出して口と机を拭いた。いや、だから何で俺を睨むの?

「しようがない。火野お前が答えろ」

「遅延魔法は魔法のタイミングと場所をあらかじめ指定して行う魔法で、特長は一つで発動する時には一人ともその場にいなくても良いこと、発動するまでの合間に、魔力の配合比率を変えられるので、普段の戦闘では出せないほどの高威力の魔法を使えること、代わりに一度遅延魔法を行つてしまったら解除は本人でも出来ないので、気をつけなければいけない」

「完全な答えた。倉守、付加魔法については答えられるだろ?」

倉守は沈黙を貫いた。

だから俺を睨むの止めろよ。

「……火野答える」

「自分ではない物に魔力をつぎ込む魔法で、大きく二つの分類に分けられる。一つは魔法道具生成魔法アーティファクトで、道具に魔力を注ぎ込むと特定の魔法が使えるようにできる魔法。もう一つは付加属性魔法で、一時的に道具そのものの性質を変化させる魔法であり、戦闘では主にこちらを使う。」

「よろしい。いいか倉守、確かに魔法実技の最初は座学で退屈かも知れないが、ここでの事を覚えてないと受業で死ぬぞ?」

火野には申し訳ないが、良い参考例なので言わせて貰うと、七年前の721蒸発事故はその典型だ。最強の魔法使いですら、魔法の

扱いに失敗して死ぬことがある」「俺は平静を装うしかなかつた。

はりわたが煮えくりかえるのを歯を食いしばり耐えた。

立ち上がつて言つたかった。親父はそんなへマをしないと。教師は次の魔法に関する話をしようとしたが、チャイムは昼食の時間を告げてしまつた。

倉守は昼食の時間になるとすぐ元<sup>ヒコ</sup>、教室から抜け出でしまう。食堂に行つてゐるのか、それとも外でランチでもしてゐるのか、俺には解らぬけれど、昼休みの時間にあいつと合つたことは無い。

俺も俺で、教室や食堂では取らずに、屋外で食べる事がほとんどだ。何故つて？

アニメの話がしたいからだ。

「お前よくあいつと楽団<sup>バンド</sup>でいられるな」

俺は仰木修也<sup>おのぎ しゅうや</sup>とよく昼食を共にしてゐる。彼の和音<sup>ハーモニ</sup>もやはり女子で、やはり彼もアニメ好きでお互いに似たよつた境遇だったので一瞬でうち解けた。

樂団<sup>バンド</sup>は魔法使いのチームの事だ。火野と倉守の樂団<sup>バンド</sup>って感じに使われる。

でも、かなめマギカで青ホムは一生来ないぜ？

「キャンセルする訳にもいかないだろ？」

「そうだけじ、俺なんか会話もあきらめてゐのじや。やっぱ女は一次元だよ」

の割には修也と和音<sup>ハーモニ</sup>は中良<sup>ヒカル</sup>と見えて見える。隣の先生は青いのか、それともアニメの話をあきらめてるのかさて、どちらだらうか？

「でよ。女子でも昼食時の倉守が何をしてるか知らなこらしこぜ」「あいつ友達いないのか？」

「だらうな。ガツカリで許されるのは一次元だけと心得る。それより今期は何見るか決まつたか？」

よだれを垂らした恥ずかしさで、授業態度が改善されたかと言つと、答えはノーだ。むしろ乙女をそこで捨てたとばかりに、以降の授業も寝まくつていた。しかもちょっとやそつとじり起きたい物だから、倉守が指される時になると俺が答えることになつた。

俺が答えるのは別に問題じやない。俺にとつてはすでに知つていることばかりだ。

しかしこの学校で初めて魔法を学ぶ倉守にとつては、一字一句聞き逃してはいけない言葉、戦場で生きていくために必要な鉄の錠のはずなのだが……

朝早く起きて、受業は眠り、学校が終わるとどこかへ消え、家に帰ればすぐ眠る。猫と同レベルの自由気ままな生活を倉守はしていた。倉守と俺が赤の他人であつたなら、どうでも良かつたのだけど、どういう事だか俺の和音だ。

だから思わずにはいられない。

受業を起きていたら、  
対話しようとしていてくれたら、  
真つ当な生活をしていたら、  
もしここが魔法特区でなかつたら、  
俺は倉守に対してこう思つことは無かつただろうと。

その事を思いついたのは、ある晴れた日だつた。

カーテンを開けると雲一つ無い空が見えた。

初夏の柔らかな日差しの中で俺はハンバーガーでも頬むよ、事務的な挨拶でもするよに、朝起きたら歯を磨くよ、何とな  
く思いついてしまつた。

倉守美海を殺そつと。  
そうすれば、俺の『コード』は樹里になるだらう。

ここは魔法特区。

殺人が許される町。

人を殺すことを覚悟と人に殺される覚悟を持つて来る学園である  
ことを。

それは俺が人を殺す覚悟がすでに出来ていると言つこと。

それは倉守も人に殺される覚悟がすでに出来ていると言つこと。

そこまで思考がたどり着くと行動は早かつた。その日の授業が終わると俺は早速魔法特区の法律と校則を調べ始めた。

人殺しを容認してるけど、サスペンスドラマよろしく、ナイフでさされてたり、毒殺されたり、ちょっと違うが強盗、詐欺、なんてしたら当然捕まる。

あくまで魔法使い同士の決闘、模擬戦、などに限られる。

逆に言えば決闘と模擬戦ならば、いくら人を殺しても問題が無いどころか、むしろ魔法使いとしては箔がついてしまうし、中には人を殺すことを目的としている奴までいる。

自分の和音<sup>コード</sup>を殺すのは難しいが、自分の和音<sup>コード</sup>を殺して貰うのは難しく無い。それが俺のたどり着いた結論だった。

もちろんその場合は共犯者が必要になつてくる。

しかしながら、共犯者を見つけるのは容易だ。

人を殺しても、金が欲しい、地位が欲しい、箔が欲しい奴はこの学校にいくらでもいるのだから。

例えば、仰木修也とか。

次の日俺は修也に倉守を殺したいと言つこと、それに協力して欲しいと言つこと、倉守を殺すことでどれだけプラスが生じるかと言ふことを懇切丁寧に話した。

修也是それらの話をひたすら黙つて聞いていた。

そして俺が全てを言い終わると「やらせてもらひづ」の一言の後に、修也是色々と語り始めた。

実家が貧乏であり引け目を感じている事、自分は魔法使いとして有名になつて金持ちになりたいと言う事。そのためには入学当初か

ら注目される何かが必要だと思つていた事。

俺は人目のつかない校舎裏に修也と共にいた。

「俺も和音<sup>ハーモニー</sup>がウザイと思ったことはあつたけど、殺そつて思つたことはない。イカれてるよ」

と言いつつ俺が投げ渡した結合指輪<sup>リンクリング</sup>を指にはめているのだから、人のこと言えたもんじやない。

「ウザいとも思つていない人間を殺そつとするお前の方がよっぽどイかれてると思うぜ？」 もつと言えばウザイから殺す訳じゃない。目標の為には殺すしかないつて結論が出たから殺すだけだ。

俺は人殺しを楽しむような醉狂では無い。

出来れば、今だつて殺したく無いと思つていい。

倉守があと少しでも協力的だつたら、頑張つて魔法に取り組んでいたら、そうしたら弱くてもどうにかできるのに。

俺が考えた倉守美海の暗殺計画はいたつてシンプルだ。

事前に遅延魔法を修也の体に入れておく。

修也達の楽団<sup>バンド</sup>と俺と倉守の楽団<sup>バンド</sup>で戦う。

そのタイミングで修也の遅延魔法を発動できるように仕組んでおく。詳しく調べない限りは修也がその場で魔法を使つているようにしか見えない。

遅延魔法の内容は相手に魔法を使われた時に、水属性の魔法三十六回連発する事にした。

一年生が使つても怪しまれないギリギリのレベルで、倉守を殺すなら十分だ。

どんなにミスしたとしても病院送りは免れない。

俺は修也に魔力を送り修也に遅延魔法を自分にかけて貰う。十五分程度で遅延魔法は完了した。

「これで明日の試合俺が倉守を殺すことになるんだな」

「ああ、それでお前は学園で一日置かれる存在になる」

「緊張するな」

「人殺しは一般的に忌避されるからな。でも、魔法使いにとつてはそれは違う。どちらかというともっと身近な物だ。だから緊張するな。この学校について、人を殺さないで卒業できる方が、珍しいだろうから」

俺はそう言つて修也をなだめた後、解散する事になった。

＊＊＊

今でも俺はある瞬間のことを忘れられない。

2004年7月21日

当時8才であった俺はそろそろ来るであろう夏休みの事で頭がいっぱいだった。修行ばかりの日々になることは解つてはいたけど、それでも何かと遊びに連れて行つて貰えるからだ。

その日は特別と言うほどの事でも無いけれど、父は東京で戦うことになつていた。

当時の父は魔法使い同士の格闘技であるウイザードの選手であり、日本ランкиング世界ランкиングとともに一位だった。それに加え日本魔法協会の理事長でもあった。

俺にとつて父は周りに自慢できる存在だった。そして俺は父を超えるようなもつと偉大な魔法使いになるとその時から心を決めていた。

父の試合を俺はテレビ越しに眺めていた。今思い返すと父の試合はつまらない。だってピンチにならずに一方的に倒してしまっからだ。

でも、それが良かつた。ああやっぱり父さんは強いんだ。そう當

時は思えたから。

しかしその日の試合は違った。父は大分苦戦していた。

俺はそれをまばたきすら惜しむように画面に食いついていた。

そしてPM20:11。画面はぷつりと消えた。

最初はテレビの故障だと思った。一緒に見ていた母はテレビの故障では無いかと疑っていたし、姉は自分専用のラジオを取り出して、試合の状況を知ろうとした。

どちらも間違っていた。

正確な情報が入ってきたのはそれから数分後。

ウィザードの試合中に東京会場が消失した。

番組は次々と事故現場を写し始める。

そこには最初から何もなかつたかのようにぽつかりと空間が空いているだけだった。

意味が解らなかつた。

無敵である父が死ぬわけがない。完璧である父がこんな事を未然に防げないわけがない。俺は母にそうやって主張したけれど、母と姉はひたすら泣きじゃくるだけだった。

そこからはもう転落するだけであつた。

事故の原因は父の初歩的なミスであったこと。

父が日本魔法協会で大量の裏金作りをしていたこと。

そうして過去には名家を序列していくば最初に来ていた火野も、今では良ければ最後、悪ければ除外されるようになってしまった。

だから俺はもう一度名誉を取り戻したい。

父は強いと言つことを俺が勝利を掴むことで証明したい。

できるのならば、父がそんな間違いをしていないと言つことも。

さつと誰かにはめられたのだと。

\* \* \*

嫌な夢だった。

定期的にフ21蒸発事故の日の事を夢に見てしまう。夢だと解つても、やはり俺は冷房の効いた部屋でコーラを飲みながら、父が苦戦している姿を眺めてしまつ。

そして画面はぱつぱつと消えて、ニュースの速報が入つて来て

もう考えるのを止めよう。

俺は枕元にある目覚まし時計を手に取つた。

AM4:32いつもより少々早い時間である。美海の布団の方を見ると、美海はすでに起きているようで、もぬけの殻だつた。

あいつホント何でみんな早起きなの？ その習慣治して受業起きろよ。

いつもの俺なら、朝食を食べ一時間ほどジョギングと筋トレをしてから学校に行くのだがけど、何というか、気分が良くない。

それが夢を見たせいなのか、これから人を殺すからなのか俺にはよく解らない。

いいや、シャワーでも浴びてサッパリしようじゃないか。

そう思い俺は脱衣所を開いた。

そこには一糸まとわぬ姿の倉守がいた。

ああ、一応あつたんだね胸。

もつと纖細な描写も時間があれば出来たのだろうけれど、残念ながらグーパンチでぶん殴られた後に、扉を閉められてしまった。

前に見られてしまつたとき俺が怒られたんだからこゝは怒る場面だよね？

一分もしないうちに倉守は脱衣所から出てきた。何故かランニングウェアを着ている。

「最低」

「んな時間にシャワーを浴びるなんて知らなかつたんだよ。つてか何でお前ランニングウェア着てるの？」

「んなのあたしの勝手だろ」

「ジョギングしてたのか？」

倉守は不機嫌そうに口をへの字にまげて視線をそらす。どうやら本当らしい。前に早起きして何してるか聞いたら読書つて言つてたのに…

「……笑えよ。どうせ天才のお前から見たら、あたしのしてる努力なんて馬鹿馬鹿しいんだろ。」

聞いたよ。あんたつてすつごい強い魔法使いなんだつてね。本来ならあたしと和音コードになるはずが無いほど飛び抜けて強いつて、そんな俺様なあんたから見たらあたしのしてること何ておまえじとみたいなもんよね。

あんたはあたしの目の前で差を見せつけて、さらに伸びていくのに、あたしと来たら学校入つてからずっと魔法の特訓してたけど、何の成果もねえしな。

だから笑いなよ。あいつらみたにさ」

「俺は笑つたりしない！！」

和音コードが弱いと嘆くことはあっても、

日常生活が悪すぎて殺したくなつても、努力してゐる人間を笑うことは絶対にしない。

父が俺にそう教えてくれたから、父のように俺は成りたいと願うから。

強くなりたいと強く願い実行しているのなら、目に見えていなく

ても、いつかたどり着けると信じているから。

「強くなりたいなら俺も今日からトレーニングに付き合ひ」

倉守の目が点になつた。

「笑わないのか」

「何で笑う必要があるんだよ。俺だつて五歳の時から毎日練習練習練習だぜ？ 確かに俺は名家の出だけど、それだけで強くなれるほど魔法使いつてのは甘く無い」

「ほら、でもあたし、不器用だし、話すの下手だし、友達少ないし」「んなの全然関係ないだろ、でもお前不器用で、話すの下手で、友達少ないな」

「んにゃろ～ いいやがつて！」

倉守は俺を殴る。全然いたくない。

お互に笑い合つ。そう言えば倉守の笑顔を見るのは初めてかも知れない。

何だ。可愛い顔してるじやん。

「倉守、俺はお前に謝らないといけないことがある」

「ん、あんたは何もしてないじやん」

「だからこれからするんだよ」

「意味わかんないけど何すんの？」

「今日の模擬戦でお前を殺そうとしていた。遅延魔法で止められそうに無いから今日の試合には出ないでくれ」

渴いた笑いが交差する。

俺はグーパンチで殴られた。

そりやあ誰が悪いかと言えば、全面的に俺が悪いのだからさ、まさか最強であるはずの俺が最弱である倉守の右手パンチだけでやられかけるとは思つてなかつた。こいつの展開はアニメ限定にしてもらいたい。

「あたし、今日の模擬戦でるからな」

「いや、お前ホント死ぬぞ！？」

「事前に攻撃来る」と分かつてゐるのに死ぬわけねーし、あたしの事なめんな！」

「とにかく、出るなよー絶対に出るなよー」

「解つた解つた。でてやるーって」

「やれやれ、とため息しか出でこない。」

「それにお姫様は自称最強の王子様がどうとかしてくれると信じてるしな」

「へいらへいらと倉守は笑つていた。

今日のランニングは中止だ。

どうやって倉守を俺が仕掛けた遅延魔法から救い出せばいいか、考える時間が必要だつたからだ。

死刑宣告を受けた倉守と言えば、機嫌良さをつけシャワーから上がってきたところだつたりする。

「シャワー上がつたよー」

「もう朝シャンするような気分じやねえよー。」

「うん？ あたしが死んじゃうかい」

「それ以外にあるか！？」

「あたしの事をそんなんに思つて……ほれんなよ」

「惚れねえよ！　だいたい何でそこまでして出たがるんだよ模擬戦

「出ないと成績響く」

「散々受業中寝てきた人間の言つ台詞がそれか！」

「散々授業中寝てたからさあ余計に出ないと不味いじゃんそれにさあ。何であたしが出るの止めなきやいけないのよ。ふつーに考えたら修也を出さない方が正解でしょ。あるいは修也に掛けた遅延魔法を解除するとか、なんで被害者があたしが一方的に被害被らなきゃいけないのよ」

「ああ！　それだ！」

「そうだよ。それを最初に考えるべきだつたんだ。

「あんたつて緊急事態になると頭が回らなくなるタイプ？」

反論できなかつた。

修也に掛かつてる遅延魔法を外すには修也の強力は絶対に必要だ。一応発動条件を満たすように修也に襲いかかると言つことも出来なくは無いけれど、逮捕されてしまう。

本末転倒もいいところだ。

魔法特区は戦闘狂の殺人鬼に優しくても通り魔には優しくない。それにこの場合だと倉守を殺そつとしていたと修也が誰かに漏らしてしまう可能性だつて出てくる。

詳しく述べられれば俺がやつたことぐらこぼれてしまつだらう。

「断る」

修也は即答だつた。

修也の携帯電話が繋がらなかつたのでホームルーム前に、やはり殺すのは中止になりました。と、とても丁寧に言い回した結果がこれだ。

「お前に取っちゃ人の命なんてすっげえ軽いんだろうな。

三万一千百八十二人だつたつけ？」 721 蒸発事故」

「今回の事とは関係ないし、俺の事でもないぜ」

俺は出来る限り平穏を装っていたが、それがきちんと出来ている自信は何一つ無い。

「まあ魔法使いの家じゃ人の一人や二人殺して当たり前なんだろ？ 気まぐれで殺したり殺さなかつたり、まるでゲームだな。俺にとつてはこの模擬戦一生が変わるかも知れないんだぜ？」

「お前が倉守を殺して評価されたとしてもそれはお前の力じゃない」「そんなの知ってるわ。

でもまずは注目されないとな。俺はお前と違つて金も才能も地位も無い。

だから今回のことはチャンスだと思つてる。

例え俺の実力が最終的に露呈してしまつたとしても「ネとか作れば今よりは絶対にマシになるからな。

それに倉守は強くないが、今学年最強どころか学園内最強候補の一人であるお前の和音だ。<sup>ハンド</sup> 魔法使いを楽団で見る人なら、人を三十人殺すよりもよっぽど高く評価する

これ以上交渉の余地は無いとでも言つようじに、修也は自分の席に座りヘッドフォンを着け携帯電話を弄り始めた。

模擬戦は五時間目から行われる。

昼休みに作戦を伝えたけれど、きちんとやつてくれるのだろうか。ハツキリ言って心配だ。

模擬戦は学校近くにある闘技場で行われる。

魔法特区内にはスーパーと闘技場が同じ数だけ存在していると言われている。

なぜそんなに有るかと言えば生徒の自主練から、中小企業が魔法道具<sup>アーティ</sup>の実験に使つたり、生徒同士が明日の昼食代を賭けて勝手に戦

つたりと、多種多様に使われているからだ。

もちろん当然魔法特区内にある魔法高校も闘技場のお世話になる。闘技場内は一般的な体育館とそこまで変わらない。あえて言うなら真つ平らであるべきなのが体育館で、真ん中に大きなリングが設置されているのが闘技場だ。

「模擬戦の前に和声魔法の手順について復習するぞ。

まず楽団は入力、出力の役割を分担して行う。

まず入力は大気中にあるマナを取り込む、取り込んだマナを転調回路アンブリファイアに入れて魔力に変換し出力アウトに対しても魔力を送る。

出力は結合指輪リンクリングから送られてきた魔力を混ぜ合わせたり、発動を指定したりして魔法を実行させる。

例えば炎の魔力が送られてきたとしよう。出力は体内で発動されることによって、自らの身体能力を向上させることも出来るし、体外に発動させることによって火を起こすことも出来る。実際に使うタイミングを指定してずらせば遅延魔法になる。

もちろんそれらを同事にこなすことも出来る。慣れれば、炎と水を同事に体内で発動させつつ、風と土を混ぜた魔法と炎魔法を体外で使うことだって出来る。

今回の模擬戦はドールマスター戦で戦う。ドールマスター戦について、くらも……火野答える

「は、はい！」

話を全く聞いてなかつた。

「じゃあ倉守起きてるみたいだからお前が答える」

「ドールマスター戦はお互いの出力だけが戦うルールで入力はリンクの外にいて攻撃してもされてもいけないルールです」

「初めてまともに答えてくれて先生はとても嬉しいけど、倉守は体育の時間だけ張り切る小学生と一緒にだな」

そこかしこで失笑が漏れた。

「ルール的にはどこにいても良いが、結合指輪で魔力を渡すときにお互いの距離が遠ければ遠いほど貰える魔力が減っていく。

逆に近ければ、魔力の減りを最小限に防げる、さらに手を繋いでいる状態だと結合指輪なしでも魔力を減らさずに受け渡す事が出来る。

ドールマスター戦のルールでは手を繋ぐことがリングの中に入るのと同じ行為になつてるので出来ないが、出来る限り和音の近くにいろ」

倉守と修也はリングにあがる。

本来のウェザードのリングならば一边が88メートルで出来ている正方形の物を指すが、この闘技場にあるのはその半分である44メートルの物だ。それでも十二分に大きいように感じられるかも知れないが、一流の魔法使いにとつては鳥かご並みのサイズだ。

倉守と修也はお互いに20メートル離れた位置で対峙する。  
(昼休みに言つた作戦大丈夫だな?)

俺は結合指輪越しに倉守に話しかける。

(アレを作戦つて言うの? もう始まるから黙つててよ)  
ホイッスルが鳴り響いた。

俺は早速大気中のマナを体に取り込み始める。

自分が炎そのものになるイメージをして貰えると、マナを取り込む事とマナを魔力に変換をする事が何となく解つて貰えるかも知れない。

ドールマスター戦は一般的に派手な戦闘になりがちと言つことで人気だが、魔法使いの視線になると状況は一変する。  
入力が出力に的確な指示と魔力を送り続け、出力はその言つこと出来る限り聞きながら状況を相手に伝える。

まさに人形遣い『ドールマスター』の戦いと言つわけだ。

もつとも、それは熟達した腕前と阿吽の呼吸が出来る楽団の話だ。  
倉守に仔細な指示を出したところで混乱するだけだ。

なので事前に出した指示は、木属性の魔力を送るから体内魔法だけ使え、攻撃のタイミングなどは全部任せることちらが指示した時

に体外魔法を使ってそれ以降体外魔法を好き勝手に使え。

……うん。ほぼ無策だ。

俺が体外魔法を使うなと言つた理由は体外魔法の発動を遅延魔法発動の条件にしたからだ。

体外魔法による攻撃、水魔法なら氷の具現化による串刺しを防ごうと思うのならば、同じく何らかの体外魔法を使うのがセオリーダ。火なら炎、風なら高圧縮された空気など、そう言つた物をぶつけて相殺させる。

事実、試合開始直後から修也は水属性の魔法を放つていて。  
一メートルほどの氷柱状の氷が地面から突き抜けてくるインパクトのある魔法だ。

しかし、攻撃そのものは直線的な動きで一発一発間が空いているために、倉守は寸前の所で後ろに避けることが出来ている。

俺は俺でもう一つやらなければならない事があつた。

周りを見渡すとすぐに見つけることが出来た。

俺はリングを見ながらそちらの方向に移動する。ドールマスター戦では入力の動きを見て、出力の動きを事前に予測すると言つた事がある。

もちろんその逆に相手に予測させるためにわざと離れた位置に移動することもある。

そのため移動そのものは誰にも怪しまれ無かつた。

試合は完全に劣勢だった。逃げ回るだけの倉守であるが、攻撃は何度かかすつてしまつていて。それに対して修也は一步ずつ全身しながら体外魔法でリングの端に追い詰めている。

木属性の体内魔法は全体的な身体能力の向上だが、それにだつて限界はある。身体能力を向上させるために魔法を使って体を酷使させていい訳なので、一瞬の為に長期的な力を先取りしてのような物だ。。

もうこれ以上倉守に逃げさせるのは無理だ。

遅延魔法の発動が無くとも、修也からの攻撃を一々三度直撃するだけで生死に関わつてくる。

(ぶつぱなせ！)

「はいよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

倉守の指輪は真紅に輝く。

リンクリング

魔力が体外に放出されるとき結合指輪は輝く性質がある。それとほぼ同時に修也の背後上部に巨大な氷の固まりが出現し、そこから触手のようになめらかに動く水が倉守をめがけて襲う。

今だ。

俺は樹里の手を握った。

その瞬間世界は凍り付いた。

時間停止は俺と樹里が使つ魔法の中でもっとも得意な魔法の一つだ。

通常の戦闘なら8秒ほど止められる。

しかしながら、これは戦闘ではない。戦闘なら時間停止後の行動なども考えて、ある程度余力を残しておかなければ成らないし、止まつた時の中で何かをしようとするならマナと魔力を時間停止とは別に用意しておかなければならぬ。

しかし今そんな事はどうちらも些末な問題だ。

三十秒。

三十秒は俺と樹里の世界だ。

俺は樹里に引っ張られてリングの上にあがる。

今にも襲つてきそうな三十六本の氷の触手一つ一つに、木属性の

体外魔法で作られた樹木達が、数秒後に破壊できるように設置しておく。

この作業が意外に難航してしまつ。

あんまりにも出来が良すぎると介入がばれてしまう可能性がある。あくまで倉守が出来そつたギリギリのレベルにしておかなければならぬ。

樹木の設置が終わり俺と樹里は元の場所に戻った。

俺は樹里の手を離した。

時は徐々に本来の速度を取り戻していく。

瞬間に表れた氷の固まりに対応して樹木がそれを蹴散らした。皆が呆然としている。魔法を使っているはずである倉守まで驚いてしまつていい。

そんな中でも俺は倉守に供給する木属性の魔力を作り始める。時を止めたばかりなので、かなりきつい。

驚きはさらなる驚きによって覆される。

さきほど全て壊したはずの氷の固まりがもう一度、そこに出来上がつていた。

俺は一瞬何があつたのか解らなかつた。

俺が仕込んだのは36発を一回分なのだ。二回目が来るわけなんて無いのだ。

違う。

他の別の人気が俺のを模倣して一回目を仕組んだんだ。

修也はこのことについてもう前に話していたじゃないか。

『魔法使いを楽団で見る人なら、人を三十人殺すよりもよっぽど

高く評価する』

倉守を殺して利益を得るのは修也だけじゃない。修也の和音も当然利益を得る。こちらが、どうにかして防げないかと思案していたときに、修也達は防がれてしまった場合の、保険として同じ遅延魔法をもう一回使うことにしていたのだ。

こうなつてしまつと、ギリギリ使えるレベルの魔法にしてしまつたのが災いになつてしまつ。

瞬間的に行つ通常の魔法ではなくて、ある程度時間をかけることが許される遅延魔法ならば実力よりも上の魔法だつて使えるだろ？ ましてや、お手本まで手元にあるのだ。出来ないわけがない。

前話してたときは和音と仲が悪いって言つてたくせに、一緒に人殺しをしようだなんて超仲がいいじゃねえかよ！

（避ける……）

俺に出来ることは全力で魔力を供給することだけだ。

倉守は最初の一撃を手元から発動していた木魔法でどうにか凌いだ。

氷は今までの単調な動きではなく、倉守にぶつかる瞬間まで水の形を取りながら、蛇行しながら倉守に近づいてくる。

しかし一発目二発目が足にかすりバランスを崩して倒れてしまつ。四発目五発目六発目が倉守に襲いかかつてくる。

「最強つて大した事無いんだな」

倉守は微笑む。

倉守の指輪がもう一度真紅に輝く。

倉守に向かつて氷が刃状になつて襲つてくる。そこを倉守は自らを吹き飛ばすように木属性の魔法を使った。

飛ばされた先は、修也の所だ。

不意を突かれた修也は身動きを取ることが出来ずそのままぶつかつてしまつ。

倉守は修也を羽交い締めにすると、七発目八発目九発目の氷に対

する盾にした。

試合結果は倉守の勝利で終わった。懸念してた遅延魔法も修也自身に魔法が当たった為に魔力と相殺してしまった。

倉守は死なかつたし、今回の模擬戦で修也の樂團はかなり注目を浴びることになった。そりや、遅延魔法と言つても72回分の水魔法なんてそんじょそこいらの一年生のやることでは無い。教師的にも詳しく調べようと思わせるレベルでは無かつたらしく、特に詮索はされてない。

これで人殺しの疑惑が世間に出来ることもなく、みんなハッピー、みんな幸せ、やっぱり物語はグッドエンドだよね！

と言うわけにはいかなかつた。

ホームルームが終わると、樹里が今までに見たことの無いような笑顔で（出来れば今後二度と見たくない）俺を手招きしていた。

一言もかわさずに俺は樹里の部屋に連れ込まれた。女の子の部屋なのに、何も嬉しくない。

「ノボル。みみちゃんを殺そうとしてたよね？」

幼なじみの田ばじまかせなかつた。

十一年間も和音やつてたら俺が使いそうな魔法なんて一発で解っちゃうよね。

「私が昼休みで聞いたときは、仰木修也君がみみちゃんを殺そうとしてるって話だつたんだけどな」

樹里が言い出す前に俺はすでに正座していた。

「そ、それはですね……」

「私ノボルに人殺しになつて欲しくないなあー。自分のわがままの為に人殺しちゃう人はイヤだなあー」

「トテモハンセイシテマス」

樹里は子供っぽい笑顔をしながら俺の周りを歩いている。

そんな状態が何十分も続いた後、樹里は唐突に手をパンっと叩いた。

そして樹里はイタズラっぽく人差し指を口につける。

「もしもまた似たような事があつたら、パパに頼んで許嫁の話を無

かつたことにして貰うね」

「マジ?」

「本気だよ」

ワインクをする樹里は非常に楽しそうだった。

## 1学期期末試験 美海▽S樹里編 予告（前書き）

予告編と本編は違つ場合があり、また、本編には出てこない台詞が  
出てくる可能性があります。ご了承ください。

またネタバレが嫌な人も見ない事を推奨します。

## 1学期期末試験 美海VS樹里編 予告

魔法高校は実技点、日常点、試験点、の三つの点で成績を決めている。

そして倉守は日常点も、試験点もダメダメであった。

「私のミルちやんが～～～！」

「あたしを名前で呼ぶんじゃねえ……風間ちやんって呼べ風間ちゃんって！」

まあ恋愛けやんは無いよな。恋愛って言つか憐哀だ。

「もしかしてあたしのままだと退学ーー？」

もしかしながらテ스트があることは入学当初からか入学前でも解ることだ。

そして退学しやすい制度であることも。

「そんなことより桃鉄しようよ桃鉄！－」

「俺は最強なんだぜ。死ぬわけ無いだろ？」

俺は微笑み樹里の頭を撫でる。

「倉守美海さん、死ぬ覚悟は出来てますか？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8195z/>

---

最強の俺と最弱の少女が魔法学園で同居生活（仮）

2011年12月28日22時58分発行